

## スラブ語喚情文の機能統語論

— 伝達機能統語論から喚情機能統語論に向けて —

本 城 二 郎

### 1. 序論

スラブ語は、シンタグマや法要素などが発話文の“中心”構造を構成する一方、FSP 語順や小詞、焦点構文や独立従属節など“周辺”要素は、発話修正を担うことにより多様な喚情文を形成する。本発表では、発話文構成の3レベル（シンタグマ・レベル、法レベル、FSP レベル）のうち、とりわけ FSP レベルに多くのバリエーションが存在するスラブ語喚情文に焦点を当て、諸例の比較分析を通じて“喚情機能統語論”の有効性を検証する。

### 2. 機能統語論と喚情機能統語論の概要

#### 2. 1. 機能的文構成 (FSP) と機能統語論の体系

機能的文構成 (FSP) とは、文の Th (テーマ) -Tr (移行) -Rh (レーマ) 分割のことで、文要素が文中で果たす伝達機能 (FSP 機能) に応じて配列される文構成を意味する。無標では、基本配列である Th-Tr-Rh 語順により伝達価値の漸進的な発展に向かい、その結果、FSP 基本機能構造 (略して FSP 基本構造) を実現することになる。文の機能構造の中心をなすのは、定動詞の TME (法・時制カテゴリー表示子) 要素で、それが固有に担う TrPr (移行プロパー) の仲介・連結役割を通じて、文全体は言語外現実と結びつき現実発話となる。他方、文内の機能構造の中心をなすのは、定動詞の概念内容部分で、それが担う Tr (移行) 役割を通じて、文内構造は要素の機能的結束 (Th-Rh ネクサス) を可能にする。なお、Th 要素が細分化される場合、Th 要素中で最も低い伝達価値をもつものと最も高い伝達価値をもつものをそれぞれ ThPr (テーマ・プロパー) と DTh (ダイア・テーマ) とし区別する一方、Rh 要素が細分化される場合、Rh 要素中つまり文要素全体中で最も高い伝達価値をもつものを RhPr (レーマ・プロパー) とし、より低い伝達価値をもつ Rh 要素と区別する。これに上記の Tr 要素 2 分割 (TrPr-Tr) も加えた結果、下記の FSP 基本配列が提起される。なお、各要素の詳細は、Firbas(1992)を参照。

●FSP 基本配列：ThPr-(ThPro-)Th-DTh-TrPr-(TrPro-)Tr-Rh-RhPr

#### 2. 2. 喚情機能的文構成 (EFSP) と喚情機能統語論の諸概念と特徴

伝達機能統語論を具体化する機能的文構成 (FSP) が無標伝達文における機能要素 (Th, Tr, Rh) の構成を扱うのに対して、喚情機能統語論を具体化する喚情機能的文構成

(EFSP:Emotive Functional Sentence Perspective) は、無標伝達文に主に修正・付加が加えられた後の有標伝達文における機能要素または(発話)文全体の構成および喚情性を扱うことから、所謂“有標伝達機能”統語論の一種と位置づけられる。その際、加えられる修正・付加としては、たとえば主観的語順(Rh-Th)に代表されるような語順修正や IC・小詞・間投詞等モダリティ表示子(ME)の付加などが一般的で、通言語的にも頻用され、スラブ語においては汎用されている。これらの付加・修正手段により実現する喚情文は、IC付加や疑問詞付加や倒置語順などにより直接的にモダリティ表示を実現する疑問文、それに(否定小詞、願望小詞等)小詞付加や(命令法、条件法等)動詞の法および両者の協力により間接的にモダリティ表示を実現する否定文、命令文、それに祈願文などと同様、主観的モダリティ表示文と見なされているが、多様な形式的バリエーションの存在や未だ文法化されていない点で、大きく異なる。他方、喚情文を扱う喚情機能統語論は、FSP原理における無標性 vs. 有標性の対立とそこから派生する伝達文 vs. 喚情文の対立に主要な基礎を置くことから、その説明原理と分析法についてはFSP原理のそれと類似か同一のものであるべきだが、用いられる諸概念と特徴は異なると考えられる。このような認識から、先駆者 J. Firbas による疑問文・否定文・命令文のための FSP 分析モデルに倣い、筆者により、以下のような喚情文分析のための諸概念とその特徴および分析モデルが提起され、統語論の新たな分野として喚情機能統語論が提案された。

[喚情文分析のための諸概念]:

EmFoc(Emotive Focus)喚情フォーカス:

喚情文中で CD 度最大の要素つまり RhPr 要素

EmFocA(Emotive Focus Anticipator)喚情フォーカス導入詞:

喚情フォーカス(RhPr)要素に先行し、それを(発話)文中に誘導する語句

[喚情文分析の特徴]:

喚情文には、話し手がある情報を受けて、自身に i. “驚き、確認、同意”等の感情(Emotion)が喚起され、ii. それを受け手に明示的/非明示的にアピールする、という2つの機能があると考えられる。iの機能は喚情性を表示する手段、すなわち定動詞のモダリティ表示子(ME)、(疑問詞・)小詞・間投詞・小詞化接続詞等の形態および焦点構文・分裂文・分割文・反復文・主観的語順等の形式により、iiの機能は(話し言語では)IC付加、(書き言語では)感嘆符付加により、それぞれ行われる。

[喚情文の分析モデル]:

喚情文の EFSP:

Cz. \*<sup>1</sup> Ten je ale \*<sup>2</sup> hloupý \*<sup>2</sup>!

Ten je ale hloupý!

(あいつは、なんて馬鹿なんだ!)

(あいつは本当に大馬鹿だ!)

分析 1.

Ten

je

ale

hloupý!

AofQ;TrPr-Tr TrPro Sp;RhPr

TME EmFocA 喚情モダリティ表示子>Rh 性 EmFoc

解釈 : ale:ME>EmFocA 喚情モダリティ表示子 ⇒ EmFoc(=RhPr)

分析 2.

Ten je ale hloupý!

AofQ;TrPr-Tr TrPro>>レーマ化>RhPr Sp;RhPr>>テーマ化>>Th

TME EmFocA 喚情モダリティ表示子>Rh 性=EmFoc

解釈 : ale:ME>EmFocA 喚情モダリティ表示子=EmFoc(=RhPr) /喚情の強調/

## 2. 3. ブルノ統語論グループとチェコ語喚情文

20世紀の初頭にチェコ・プラハの地に始まり、世界の言語学研究に貴重な貢献を果たし、今なお数多くの言語学者に多大な影響を与え続けている言語学研究の主要な潮流の一つが“プラハ言語学派”と呼ばれている。他方、その流れから少なからず影響を受け同時平行的に進められてきた言語学研究のグループがチェコ・ブルノの地に興り、30年代から70年代にかけてスラブ語や他の諸言語を対象とする統語論研究を花開かせたことは、あまり知られていない。この統語論研究の流れは、“ブルノ統語論グループ”<sup>\*3</sup>と称され、統語論全般に渡り幾つかのユニークな知見を残している。そのうちの 하나가、“喚情統語論”で、残された論文資料からは、文の伝達性すなわち伝達文を扱う統語論に対して、今まで扱われることが少なかった文の喚情性すなわち喚情文を扱う統語論として位置づけられている。グループを代表する主な言語学者には、F. Trávníček (チェコ語)、J. Brym (ロシア語—チェコ語比較)、M. Grepl (チェコ語)、J. Firbas (英語)、R. Mrázek (ロシア語—スラブ語比較)、R. Večerka (古代教会スラブ語)等が挙げられるが、スラブ語全体の広範な比較を通じて喚情統語論の重要性と可能性について提起したのが他ならぬR. Mrázekである。その後の大きな流れとしては、A. Svoboda (英語; J. Firbasの弟子)やP. Karlík (チェコ語; M. Greplの弟子)等の統語論諸研究の中に練磨・集約され、彼らのチェコ語統語論の主要なテーマの一つとして注目されている。以下に、本論の先行的理論研究として、Karlík & Svoboda(1982)の“喚情性”に関する先見的な知見の一端を紹介し、“スラブ語喚情機能統語論”への一助とする。

[チェコ語喚情文—3レベル喚情性の同時表示—]:

Cz. A *mlčēt se tady bude!*/喚情文・不定詞文/ (いいですか、ここは黙るでしょうよ!)

A : 喚情小詞としての機能/モダリティ・レベル/

*mlčēt... bude* : 未来形による現在形の代用/文法レベル/ + 直説法による命令法の代用/モダリティ・レベル/ + 直説法による命令法の代用/モダリティ・レベル/+文頭Rh/FSPレベル/ + 有標イントネーション (急下降調文第2要素)

*se* : 脱動作主構文の一般人称 (主語) /文法レベル/

*tady* : 語彙的意味の転用

! : 有標句読法 (感嘆符)

<<Všichni zde přítomní, mlčte. /非喚情文・命令文/(ここにご出席の皆さん、お静かに。)

### 3. スラブ語喚情文の形式的特徴と機能的特徴

#### 3. 1. スラブ語喚情文の形式的特徴

スラブ語は、喚情性表示のための文法手段として、イントネーションなど(韻律的手段)の他に、分割文/反復文や分裂文、それに主観的語順など統語的手段や疑問代名詞/指示代名詞、小詞、間投詞(またはそれらの組合せ)など語彙的手段が慣用化されている。各スラブ語間の相違は、それら文法手段の使用分布により特徴づけられる。以下、本節では、その形式的特徴を明確に抽出することが比較的困難なイントネーションは除外し、さらにその(焦点化や有標化など)機能的特徴から統語形式のバリエーションを列挙することが容易な主観的語順や分裂文などは次節に委ね、主に語彙(統語)的手段の喚情性についてスラブ語の比較分析を試みる。

(1) Cz. Ten je ale mazany! (こいつは、なんと狡賢いんだ!)

Rus. Nu i pogoda že segodnja! (なんとという(よい・ひどい)天気だ、今日は!)

S.-Cr. Uh, što je to dobra supa! (おや、まあなんと美味しいスープだ!)

Bul. Ej če vreme! (まあ、なんとという天気だ!)

強い喚情性を表示する手段としては、チェコ語に代表される所謂“独立従属節”すなわち主節の省略により独立した従属節が観察される。これらは、チェコ語の下位タイプとしての“že~(〜ということ)”など接続詞に導かれるものとともに、歴史的には、疑問詞疑問文を起源とする喚情文と見なされる。

(2) Cz. Jak je statečný! (彼はなんと勇敢だ!) <~~Je užasné~~, jak je statečný.

(私は、~~彼がなんと勇敢なのかに驚いている~~)

Že jste si toho nevšimli! (貴方がこれに気付かなかったとは!)

<~~Divím se~~, že jste si toho nevšimli.

(貴方がこれに気付かなかったのに、私は驚いた。)

#### ●語彙的手段による喚情文

・疑問代名詞や指示代名詞による喚情文

疑問代名詞による喚情文は、特に東スラブ語や南スラブ語で頻用されている。

(3) Rus. Kakaja krasota! (なんて美しいだろう!)

Ukr. Jakyji (že) ty optymista! (君は、なんとという楽観家だ!)

Sln. Kakšna lepota! (なんて美しいんだ!)

Bul. Kakāv optimist si (ti)! ((君は)なんてのんき/軽率なんだ!)

チェコ語の疑問代名詞“co(なんと<何)”タイプは、セルビア・クロアチア語で最も頻用されている。このタイプは、スロベニア語やブルガリア語にはない。一方、ロシア語では、複合疑問代名詞“čto za(なんとという)”タイプも観察される。

(4) Cz. Co je tady labutí! (ここにはなんと白鳥たちがいるんだ!)

Slk. Čo komárov! (なんという蚊(ども)だ!)

Pol. Co za szczęście! (なんて幸福なんだ!)

Rus. Čto za prelest! (なんて素晴らしいんだ!)

S.-Cr. Što ste vi lakomisleni! (あなたはなんてのんき/軽薄なんだ!)

指示代名詞による喚情文は、疑問代名詞に次ぎ頻用され、特にチェコ語の“takový (大変なくそのような) /tak (大変くそう)”タイプは、大多数広い使用域を持つ。通時的には、元来の直示的機能から喚情的機能の発生が明らかである。

(5) Cz. Takový náfuca! (大変道德ぶった人だ/大変な堅物だ!)

Slk. Takáto ľahostajnosť! (大変(な)無関心だ!)

Pol. Tak tu gorąco! (ここは大変暑い!)

Rus. Takoj negodjaj! (たいへんなごろつきだ!)

S.-Cr. Takva sreća! (なんという幸運だ!)

Bul. Tuk e tolkova toplo! (ここは大変暑い!)

チェコ語の名詞化(一致)代名詞“ten, ta, to (それ/これ)”タイプも、他の(一致)指示詞と同様、直示的間投詞が起源である。例えば、Cz. Ten je silný! (あいつは強いんだ!) <To! Je silný. (確かに! 彼は強い。)> このタイプは、スラブ語の中でも特にチェコ語に特徴的で、それはドイツ語の“der, die, das”タイプとの共起の結果と推定される。意味的には、改善的・軽蔑的な皮肉のニュアンスを持つ可能性がある。このタイプは、他の西スラブ語では比較的頻度が低く、他のスラブ語域では現れない。

Cf. G. Der ist (aber) stark! ((それにしても)あいつは強いよ!)

(6) Cz. Ta má nohy! (彼女は足があるんだ!)

Slk. Tá mala úspech! (彼女は成功したんだ!)

Pol. Ten się (dopiero) opalił! (彼は(ようやく)日焼けしたんだ!)

#### ●小詞による喚情文

小詞による喚情文は、チェコ語の“to”タイプに代表される強調文で、それは古代の直示語“to”が同一の音形のまま残存し、今なおチェコ語で主に、ソルブ語やスロバキア語それに(チェコ語といくつかの統語的同形を共有する)南スラブ語のスロベニア語では比較的低い頻度で、セルビア・クロアチア語では散発的に、それぞれ用いられている。

(7) Cz. To prší! (雨が降ってるんだ!)

Slk. To bol mráz! (凍えるほど寒かったんだ! <凍てつく寒さだったんだ!)

U.-Sorb. To pak so deščuje! (雨が降ってるんだ!)

Sln. To je hladno! (寒いんだ!)

S.-Cr. To je delija! (英雄なんだ!)

このタイプの発展形には、ロシア語の“vot (これ/ここ/ほら/なんて) <voto<oto<to”、

ウクライナ語やポーランド語の“oto (ほらここに/なんという)”がある。一方、指示的間投詞“se!”起源のウクライナ語“os’ /oce”や白ロシア語“vos’ ”は頻度が高い。

(8) Pol. Oto poezja! (なんという詩だ!)

Rus. Vot molodec! (なんてしっかりした若者だ!)

Ukr. Os’ tak zemljak! (ほらこちらが同郷人だ!)

Brs. Vos’ dyk mĕd! (ほらこれが蜂蜜だ!)

(主に逆接接続詞の機能を持つ) チェコ語の小詞“ale (なんと/しかし)”タイプは、多様なバリエーションにより微妙なニュアンスを表示する。とりわけポーランド語やスロバキア語では感嘆の表示子として、チェコ語やソルブ語では専ら装飾的要素として、それぞれ用いられている。他方、南スラブ語では、スロベニア語とセルビア・クロアチア語で“ali”が散見されるものの、ブルガリア語では複合表現“ama ěe”が頻用されている。

(9) Cz. To je ale výtečník! (それにしてもこちらは立派な方だよ!)

Slk. Ale prší! (まさか、雨が降っているんだ!)

Pol. Ale(ż) optymista z ciebie! (君はなんて楽観家なんだ!)

U.-Sorb. Tajke je le wjedro! (確かにそれは食べ物なんだ!)

Sln. Ali dežuje! (まさか、雨が降っているんだ!)

S.-Cr. Ali su svi zinuli od čuda! (まさか、彼らはびっくり仰天したんだ!)

Bul. Ama ěe e gorešto dnes! (それにしても今日はなんて暑いんだ!)

その他の注目すべき小詞としては、東スラブ語の重複表現“nu i (なんという)”、スロバキア語の“či”、ブルガリア語の“ěe”などがある。

(10) Slk. Či som rád, že si zdravý! (君が元気でなんて嬉しいことか!)

Rus. Nu i pogoda! (なんという(素晴らしい)天気だ!)

Ukr. Nu i moroz! (なんとひどい寒さだ!)

Brs. Nu i narodu! (なんという人々だ!)

Bul. Ej ěe se uplašich! (ああ、私はなんて怖かったことか!)

### ●間投詞による喚情文

間投詞による喚情文は、スラブ語の感嘆的喚情文に特徴的である。文は、専らその小さな部分では自身が喚情性付加を表示し、より大きな部分では他の喚情機能要素との結合を実現する。言語の中には、東スラブ語のように、より多様な喚情表現を慣用化するためにより多くの間投詞を付加する傾向のものもあれば、他の(例えば社会言語学的)領域と重ならないかぎりより制限的に間投詞を使用するようなものもある。

(11) Cz. Ach, ten to zahrál! (おお、あいつは本当に実行したんだ!)

Slk. Ľa, aký vetrisko sa strhol! (ほら、なんと強風が吹き出したんだ!)

Rus. Ech, i choldišěe že zdes’! (ああ、確かにここは寒いところだ!)

Brs. Och i balbatun! (ああ、本当に愚か者だ!)

S.-Cr. Uh, što je med! (おお、なんと沢山の蜂蜜があるんだ！)

Bul. Ach kolko se uplašich! (ああ、私はどれほど怖かったことか！)

### ●統語的手段による喚情文

統語的手段による喚情文は、スラブ語全体に観察され、感嘆的喚情文の諸タイプおよび下位タイプの宝庫になりうるものと考えられる。具体的には、分割文/反復文、喚情与格付加、それに独立従属節が汎用されている。

[分割文の例]: 各分割要素に IC が置かれ、連鎖 Rh 要素による“取立て”が実現される。

(12) Cz. Pronajmeme skladové prostory. Poblíž centra. Na pět let.

(我々は、保管部屋を貸しましょう。中心地近くで。5年(契約で)。)

Rus. I nad otkryvšimsja morem Barenca vidim nizkoje svobodnoje solnce. Solnce v tri časa noči.

(開けたバレンツ(の)海の上空にも低くて広々とした太陽が(我々に)見える。真夜中3時の太陽が。)

Bul. Dadocha mu srok. Do edna godina i edin den.

(私は)彼に最終期限を決めた。1日と1時間以内までと。)

[反復文の例]: ブルガリア語では、人称代名詞の短形および長形による直接/間接目的語の重複(構文)が文法化され、前景化を実現する焦点(化)構文の一種として位置づけられている。他のスラブ語(とりわけ東スラブ語)では、疊語文として強調の機能しか表示出来ない点で、むしろ文体的と見なされる。

(13) Rus. Molodec moIodcom! (若者らしい若者だ！)

Bul. Mene veče ne mi e máčno za sveta. (聖人を亡くして悲しいということは私にはもはやない。) ☞<sup>※2</sup> Rh要素の重複: バルカンスラブ語で一般的

[喚情与格の例]: U.-Sor. To pak je či mróz! (本当に寒いんだよ！)

[独立従属節]: (2)の例文

### 3. 2. スラブ語喚情文の機能的特徴

本節では、専らスラブ語の(発話)文の喚情性に関与的と見なされる機能形式の2種、すなわち i. 焦点(化)小詞・構文/分裂文による喚情文、それに ii. FSP 語順による喚情文(すなわち主観的語順)の機能的特徴を探るべく、具体例の比較分析を試みる。なお、イントネーションの機能的特徴については、前述と同じような理由でその抽出が比較的困難なため除外されるが、必要な場合には一部触れることにする。なお、以下の諸例では、喚情性表示のための手段(喚情性表示子)は、喚情機能的文構成における喚情フォーカス導入詞(EmFocA)役割を担い、全て(細)下線で表示されることを付記する。

#### i. 焦点(化)小詞・構文/分裂文による喚情文

焦点(化)小詞による喚情文は、要素の CD (伝達動力)度を高める役割を持つ焦点(化)小詞により実現される有標文である。FSP の観点に立つと、Th 要素および Rh 要素が2つ

以上の部分から構成される（発話）文の場合、各要素内でより前景化する部分（Th 要素では DTh 要素、Rh 要素では RhPr 要素）に IC が付与され、その結果、卓越強調により IC 付与された 2 要素の対立関係のみが卓立することになる。焦点（化）小詞は、その統語的定位置が通常 Th 要素の場合も Rh 要素の場合も焦点部分の直前となることから、後倚辞が一般的である。前倚辞すなわち後置要素となるのは、当該スラブ語の文法規則により義務的となる場合で、とりわけ東スラブ語の“ze”は、（発話）文の最初の強勢語の直後に置かれ、名詞句内の語の分離が生じることになる。関係節中では、語順規則から文頭に固定された前方照応語つまり関係詞が焦点化要素である場合、前倚辞となる。

(14) Cz. inteligence, která především se podílela na ustálení spisovných jazyků  
 （標準文語の定着に携わっていた他ならぬ知識人）

Rus. v ruskom že jazyke（まさにロシア語で）

Bul. Slānceto, ot koeto edinstveno zavisi...（（人が）ただ頼るばかりの太陽）  
 焦点（化）構文による喚情文とは、後方照応代名詞によって（発話）文の Th 要素または Rh 要素の先取りを可能にするか、あるいは前方照応代名詞によってすでに焦点化された Th 要素または Rh 要素の（発話）文中での再述を可能にするような“取立て”構文のことを指し、スラブ語では汎用されている。形式的には、IC 付与の焦点化要素が（発話）文本体から分離されることになる。語彙的には、指示代名詞や人称代名詞や副詞が前方照応または後方照応役割を担っている。

(15) Cz. Tu prodavačku, tu přeřadili jinam.（その売り子はと言うと、彼女はどこか他の所に配属された。）

Rus. U germancev, u tech ne po našemu.（ドイツ人たち、彼らにとり我々のためということはない。）

Bul. Ženeneto ne stavaše togava s kandārmi - v onija mážki vremena.

（年頃の娘は、そのとき説得に反対の立場ではなかった。まさにあの男らしい時代には。）

通例、先行文の焦点化 Th が頻用される一方、Rh 先取り代名詞は比較的稀である。Th 焦点化の特異構文としては、チェコ語タイプ“to se týče<sup>+属格</sup>/pokud jde o<sup>+対格</sup>（～に関しては）”、ロシア語タイプ“čto kasajetsja<sup>+属格</sup>（～はどうかと言えば）”、ポーランド語タイプ“jeśli chodzi o<sup>+対格</sup>（～に関しては）”、ブルガリア語タイプ“što se otnasja do（～に関しては）”などが汎用されている。

分裂文による喚情文は、典型的なタイプのレーマ化構文としては、チェコ語の“Byl to on, který/kdo... +関係節”があげられる。ここでは、無標の場合、主節中の文脈依存の（代）名詞主語が焦点化される結果、RhPr 要素として IC を担う一方、文脈独立の関係節全体が Th 要素としての解釈を受ける。他方、有標の場合、後者すなわち関係節に IC が移り、その結果、主節の焦点部分のレーマ機能が弱められることになる。



(16) Slk. Bol to otec, kto rozhodol. (決断したのは、父だった。)

Rus. Eto byl on, ktorogo ja videl včera. (私が昨日会ったのは、彼だった。)

S.-Cr. To je on, koji je rekao... (... と言ったのは、彼だった。)

Bul. Toj beše tozi, kojto vidja edna sárna. (一頭の鹿を見たのは、彼だった。)

ii. F S P 語順による喚情文 (主観的語順)

F S P 語順による喚情文 (主観的語順)とは、無標の FSP 基本配列が実現する客観的 Th-Rh 語順から逸脱した有標の Rh-Th 語順 (またはそのバリエーション) をさし、単に要素の CD 度の漸進的下降のみならず (発話) 文の担い手である話者の伝達内容に対する主観的・個人的・喚情的態度を表示する。伝達内容は、その際、話者によるなんらかの評価 (例えば、意外性、驚き、注意喚起) を受けることになる。

(17) Cz. Jen snih a vitr umějí takhle čarovat. \*<sup>2</sup> ⇨ 話者による“意外性”評価

EfocA Rh Th

(ただ雪と風だけがこのような魔法をかけることが出来るんです。)

Slv. [Leto 1888, leto treh osmic, je minulo.] Dosti je bilo grmenja in govornjenja o letu treh osmic. Rh Th

([1888 年、38 年、が過ぎた。] 38 年についてカヤガヤ言ったり話したりする人は、実に大勢いたんだ。)

主観的語順としては、Rh-Th 語順が一般的であるが、言語により主要な語順原理が異なり、一義的に Rh-Th 主観的語順の有標性を決定することは出来ず、喚情性と非喚情性との境界が曖昧になることから、両性は連続体と捕らえる必要がある。つまり、喚情性表示語順の連続体: 有標 FSP 喚情 Rh-Th 語順 > 無標文法喚情 Rh-Th 語順 > 有標文法非喚情 Rh-Th 語順 > 無標 FSP 非喚情 Rh-Th 語順。主観的語順のバリエーションとしては、Th-Rh-Th 語順 (通常は Rh 文末第 2 位置) が汎用されるが、文頭 Rh 語順と較べて喚情性への関与は低い。このタイプの主観的語順は東スラブ語で頻用され、Rh-Th または Th-Rh-Th 語順は口語の規範と見なされている。その結果、語順の顕著な自由が生ずることになる。

(18) Rus. Strašno! Byť ničego ne možet strašneje!

Th Rh Th

(恐ろしい! もっと恐ろしいことに、何もないことがあるかもしれない!)

Bul. [Prosti mi otče, če ne te priema kakto podobava,] zaštoto bez žena e mojat dom. Th Rh

Th

([父よ、十分に君を受け入れなくて、許してくれ] 女なしが我が家だから)

(注) \*<sup>1</sup> (語派別) 言語名の略称は、下記の通りで、以下それに準拠する。

西スラブ語: Cz. チェコ語/Slk. スロバキア語/Pol. ポーランド語/U.-Sorb. 上ソルブ語/L.-Sorb. 下ソルブ語; 東スラブ語: Rus. ロシア語/Brs. 白ロシア語/Ukr.

ウクライナ語/ ; 南スラブ語北群 : Sln. スロベニア語/S. -Cr. セルビア・クロアチア語 ; バルカン・スラブ語 : Bul. ブルガリア語/Mac. マケドニア語

※<sup>2</sup> 太字は IC (イントネーション・センター) 付加要素を、斜字体はフォーカス (Foc:RhPr) 要素を、(細) 下線は喚情フォーカス導入詞 (EmFocA) を、☞ 記号は観察結果・注記を、太下線は FSP 要素部分を、それぞれ示す。以下、同様。

※<sup>3</sup> このグループの詳細に関しては、Mrázek (1985) を参照。

#### 4. 結論

スラブ語の喚情文の比較分析の結果、以下の傾向的特徴が抽出された。

- i. チェコ語は、指示代名詞・小詞や独立従属節や焦点 (化) 小詞による喚情文、それにテーマ焦点化構文 (～に関しては) や分裂文や主観的語順の汎用が見られる。
- ii. ポーランド語は、小詞や焦点 (化) 小詞による喚情文、それにテーマ焦点化構文 (～に関しては) の汎用が観察される。
- iii. 東スラブ語は、疑問代名詞や複合疑問代名詞や小詞 (重複) や間投詞付加による喚情文、反復文や焦点 (化) 小詞による喚情文、テーマ焦点化構文 (～に関しては : ロシア語) の汎用、それに口語的規範としての主観的語順の頻用が観察される。
- iv. 南スラブ語は、疑問代名詞 “co (なんと<何)” タイプや焦点 (化) 小詞による喚情文や、それに分裂文や主観的語順の頻用、反復文の使用、テーマ焦点化構文 (～に関しては) の汎用が確認される。

#### 参考文献 :

- Běličová, H. et al. (1996): *Slovanská věta (Slavic Sentence)*, Euroslavica:Praha.
- Firbas, J. (1992): *Functional sentence perspective in spoken and written communication*, Cambridge University Press:Cambridge.
- Grepl, M. (1967): *Emocionálně motivované akualizace v syntaktické struktuře výpovědi (Emotionally Motivated Actualization in the Syntactic Structure of Utterance)*, Brno.
- 本城 二郎 1998: 「西スラブ語の情緒構文—FSP と EASP (喚情態度的文構成) のダイナミズム—」, *NIDABA* No. 27.
- Horálek, K. (1962): *Úvod do studia slovanských jazyků (Introduction to the Study of Slavic Languages)*, SPN:Praha.
- Karlík, P. & Svoboda, A. (1982): *Skladba češtiny pro cizince (Syntax of Czech Language for Foreigners)*, UJEP:Brno.
- Mrázek, R. (1985): “Emocionalita slovanské věty (Emotionality of Slavic Sentence)” *SPFFBU* A33:Brno.